家庭の同行（どうぎょう）12
～ひき出されてゆく生きる力～

くだかけ会代表
和田重良

○穴のあきそうな心を、充たしてくれる「もの
○つないだ手は離さないと、信じている「こと
○あそこに帰れば迎えてくれると「あんしんできる」こと

お金の力を教えろ

お金は全国どこにでも……

日本中のあっち行ってもこっち行ってもその土地その土地の人たちが皆、ぼくらが使っているお金を持っていて、それを活用している姿を見ると不思議な感じがします。当り前のことなのでしょうが、日本中（世界中にも）お金が行き渡っていて、それを利用して生活しているのですから……おまけにそれは誰かが全体をコントロールしているのです。

そういうお金のカラクリは知らなくてもよいのですが、少しは「お金ってどんなものなのか」を考えてみることも大事なことです。

お金って、人が作った「価値の代替品」なのです。元々は物々交換だったので物のロスはないわけですが、消費する物質によっては物々交換の原理を越えて、例えばお金でエネルギーの消費を買ってしまうと「取り返し」がつかなくなってしまうカラクリに気がつかなくなってしまうのです。それでは文明は行きづまってしまいます。

ところが絶縁物に

とにかくものすごい金額のお金が日本中に流通していて、それによってモノやココロの流通になっているのですね。

ぼくは流通経済のことはよく分りませんが

和田重正言葉抄

「母の日」を願みて

毎年五月の「母の日」にはいろいろな所で催し事が行なわれます。家庭においても子どもたちは赤いカーネーションを胸につけて「お母さん、ありがとう」を表わすのにいろいろな工夫をこらします。

かしアメリカから流行ってきたこの行事は、まだ母子密着度の高い日本の家庭にはあまりピッタリしないのではないかと思われます。

これが子ども達のお母さんに対する感謝の心を育てるのに役立つと思うのは学校に道徳科を特設したのと同程度の超楽天的の発想で、空しいことです。

この日を感謝と同時に「母の自覚の日」ときめてマスコミ、学校や公民館主催の講演会で、母親に啓蒙的な呼びかけをすればよいと思います。

一般に「母の自覚」は物質文明の発達に反比例して急激に衰えて来ています。それだけ子ども達は幸せを失って来ているとも言えます。恵ろうと思ったわけでもないのに、ひとりでに子どもができて母になってしまったが、さてこの母親とはいったい何なのだろう。母はどうあればよいのだろう。——この問題意識を深め、勇を奮ってそれに真正面から取り組むキッカケとしてこの日を活用してくれればよいのだがと、毎年思います。

（昭和56年くだかけ二十九号より）

家庭の生活や子どもの教育のお金の力についてはちゃんとした考えと意見を持っています。

お金のことについての生活のスタンスによっては人間はダメにもなるし、立派にもなるのです。また、生活が明るくもなるし暗くもなるのです。

欲望の問題だから

もっともマズイ方法が「お金やモノで意欲の動機づけ」をしようとすることです。いつも言う「取り引き、交換条件」を出して子どもに何かをさせようとするのはあまりいい方法ではありません。その中でも「お金やモノ」を取り引きや交換条件に使うことは絶対にウマイことではないのです。

お金やモノは場合によってはこころの絶縁物になってしまいます。それは人間の心を支配する「欲望」に問題があるからです。

お金銭欲や権勢欲の類は食欲や性欲というのとは基本的に生命や身体と関係なく二次的な欲望です。ですから使い方を間違えると人との関係がうまく交流できなくなるのです。

本能に直結の食欲や性欲も使い方でよくも悪くもなりますが、お金や物を親子が取り引きに使いはじめると「信頼」というものがまずどこかへ行ってしまいます。それはお金や物が絶縁物になってしまうからです。

楽しみを買う

お金にはその「得方」と「出し方」と両面があります。その間に「蓄える」ということもあります。入って来るものがあって、それを上手に使うのですから簡単な理屈です。……と思うのですが、子どもによっては「金が欲しい」と言うので「何で?」ときくと「いや、ただ金が欲しい」と言うのです。そういう子に出会う度に「この子の家ではお金のことをどのように教えているのだろう」と疑問に思います。

お金で物や手段や状況を買おうとする時、やはりそれは「悦びや楽しみ」を買っているのです。そうでなければお金は必要ありません。ですから、お金が欲しい前に「～のために」というのが当然あるはずなのです。「夢を買う」なんていいですね。楽しみを買う、生活を買うのですから軽くも簡単でもないのです。

お金を得る方はとても大切で、練習が必要なことです。

親（時にはおじいさんおばあさん）が自由に与えていると足りない時にどうするかという工夫もできなくなります。

ぼくがよくおすすめしていることは、子どもたちに「ただばたらきをしてもらう」ことです。

ただはたらくと、「自分のはたらき」ってどんなことなのかよく分ります。いきなり世間相場の報酬をもらうのではなくて、中学生や高校生や大学生の頃に「はたらき」が自分にも相手にも、悦びであり、喜ばれるものであることを確認するべきだと思うのです。

お金のありがたさというのは報酬というよりも「悦び」であったら、足りない時も余っている時もどう対処していくのかがわかるように思うのです。

貯める

ぼくはこれまでの人生でお金を貯蓄するという場面が一度もなかったので、貧乏と言えば貧乏な暮らしだと思います。

ただ、人間は貯める能力を持っているのでこの便利さや快適さを手に入れたのだと言われています。水も電気もお金も貯めることができなかった困って生きてしまいます。

お金はちょっと特殊で、いっぱい蓄えている人から借りたり、持っている人から回してもらったりもできます。

お金の本当の力を教えることができれば上手に人生に活かしていくヒントが得られます。一生不平不満を言って終ってしまわないためにもガマンの必要なこともあるのですから。

お金はやっぱり「出し方（使い方）」によって人生が深いか浅いか問われそうですね。

一口メモ

「よろこんでもらう」お金はそのように使うとイキてきます。なめらかに働きます。